

コロナ禍における避難所運営

～令和2年台風10号～

9月7日、過去最大級の警戒が呼びかけられた台風10号が大分県西部を通過しました。令和2年7月豪雨の経験もあり、住民は早目に避難行動を起こしました。

避難所は、新型コロナウイルス感染予防対策で、収容人数を減らし、開設場所を増やして自治体職員が対応にあたりましたが、マンパワーの不足が課題となりました。

中津市は、令和2年7月豪雨の際、避難所で対応した職員が受付などの手続きに人手がとられ疲弊する経験をしました。今回、更に6ヶ所（うち、福祉避難所併設1ヶ所）増やすにあたり、防災士に応援を依頼しました。

防災士は、避難所の間仕切りや段ボールベッドの組み立てなどの開設作業や、受付業務の応援に加え、要配慮者の見守りなどを担いました。

この防災士と活動した中津市の取組は県内でも初めてのことです。



中津市防災士協議会の稗田二郎会長は「“地域の防災”は行政・自治会・民生委員・防災士の4者がしっかりと連携しなければいけないと考えます。今回の避難所の立ち上げの活動をきっかけに、様々な組織と更に繋がりを深めて地域に貢献していきたい」と話されました。



大分県は東日本大震災をきっかけに、平成25年から地域の防災リーダーの育成に力を入れ昨年1万人を突破しました。コロナ禍の中、この中津市の取組がモデルとなって、防災士の活躍の場が更に広がる事を期待します。

中津市は東日本大震災をきっかけに、平成25年から地域の防災リーダーの育成に力を入れ昨年1万人を突破しました。

コロナ禍の中、この中津市の取組がモデルとなって、防災士の活躍の場が更に広がる事を期待します。



防災士のお世話をした中津市職員



中津市防災士協議会
稗田二郎会長